

グリコシド剤については、本邦には MRSA にも効果のあるアルベカシン（以下 ABK）があり、これを併用薬のひとつとして使用することも有用ではないかと思われる。そこで、当院で FN に対し ABK が使用された症例について、その効果を調査した。FN 症例 16 例 27 件中、効果判定できたものは 23 件で、18 件 78.3% に有効であった。併用薬の変更や好中球数増加の時期もあるため効果の評価は難しいが、FN 症例において治療に組み込むことは有用と思われた。問題点として、好中球が 0 に近い状態での ABK の PAE が不明のため、1 日 1 回投与法の適応が妥当であるかどうか、さらに血中濃度の適正值が不明であり、今後の検討が必要と思われる。

## 6 ノロウイルスによる急性胃腸炎アウトブレイク収束の経験

吉川 博子・志田 泰世\*・野口久美子\*

金子 潤子\*・金沢 宏\*\*

新潟市民病院感染症科

同 看護部\*

同 手術部\*\*

平成 15 年 12 月 30 日、新潟市民病院の神経内科と整形外科の混合病院の入院患者 47 名中 13 名に下痢、嘔吐の症状が出現した。準夜勤務者にも同様の症状が認められた。病棟発生調査および脱水症状の患者への治療が開始された。出勤していないスタッフにも同様の症状が多いことがわかった。緊急対策会議を開催し、患者隔離・スタンダードプリコーションの徹底及び厳重な接触感染予防策が実施された。胃腸炎の原因はノロウイルスであることが判明した。1 月 8 日には有症状患者は 0 となり、10 日患者の隔離解除・平常業務体制となった。ノロウイルスは、症状が発現する以前の潜伏期にもウイルスの排出があること、初発の症状が噴射状の嘔吐であり、エロゾル化し、飛沫感染することより、病院などの集団生活している場においてアウトブレイクをおこしやすく注意が必要であると考えられた。

## 7 口腔扁平上皮癌における docetaxel 併用術前放射線化学療法の臨床病理組織学的検討

小根山隆浩・田中 彰・戸谷 収二

山口 晃・廣安 一彦\*・岡田 康男\*\*

又賀 泉\*\*

日本歯科大学新潟歯学部附属病院

口腔外科

同 口腔外科学第 1 講座\*

同 口腔外科学第 2 講座\*\*

日本歯科大学新潟歯学部附属病院口腔外科で治療を行なった口腔扁平上皮癌一次症例 12 例について、docetaxel を併用した術前放射線化学療法群 5 例と非併用群 7 例について比較検討を行った。

docetaxel 併用群 5 例の内訳は、男性 2 例、女性 3 例、平均年齢 49.8 歳で、原発部位は舌 2 例、上顎歯肉 2 例、下顎歯肉 1 例で、T 分類では T2 : 2 例、T3 : 2 例、T4 : 1 例であった。docetaxel 投与量は 70mg から 80mg で、臨床的治療効果判定では舌 1 例、上顎歯肉 1 例の 2 例で CR と判定し、組織学的にも Grade IV b, Grade III であった。

有害事象は docetaxel 併用群でより重篤な白血球減少と著明な脱毛を認めた、

以上より docetaxel 併用による術前放射線化学療法の有効性が示されたが、適切な症例の選択と対応が必要であると思われた。

## 8 ロシアでのヘリコバクター・ピロリ感染と病原性：国際共同研究

種池 郁恵・山本 達男

新潟大学大学院医歯学総合研究科

国際感染医学講座細菌学分野

*Helicobacter pylori* は胃炎、消化性潰瘍さらに胃癌などの発症と関連する病原菌である。ロシアとわが国は人的、物的な交流が急増し、感染症の流入が心配される。極東ロシアでの感染症実態調査の一環として、*H. pylori* について調査した。

ウラジオストク医科大学 Vladimir N. Potapov 教授らの協力を得て、61 名の胃炎・消化性潰瘍患者から胃生検材料を得、菌株を分離した。薬剤感

受性試験は NCCLS の常法に従って行った。病原性遺伝子型は PCR 法で解析した。

*H. pylori* 陽性率は 77% であった。薬剤感受性はメトロニダゾール耐性が 72% であった。原因は不明であるが、原虫治療、大腸疾患などでの使用による耐性化やメトロニダゾール耐性菌の流行が考えられる。クラリスロマイシン耐性は 4.3% で低頻度であったアモキシシリン、テトラサイクリン耐性は検出されなかった。病原性遺伝子型は様々なタイプがみられた。

## 9 マクロライド系抗菌薬の免疫抑制(ステロイド様)作用の検討

宇野 勝次・齊藤 幹夫・阿部 学

水原郷病院薬剤科

マクロライド系抗菌薬 (MLs) は、抗菌薬の中ではアレルギー性が底く、びまん性汎細気管支炎 (DPB) に有効である。そこで、PHA 刺激による単核球産生の炎症性サイトカイン・ケモカインを白血球遊走試験のチャンバー法 (LMT-camber) で測定し、MLs の免疫抑制作用の検討を試みた。その結果、PHA による遊走活性に対して EM と CAM は  $1\mu\text{g}/\text{mL}$ 、AZM は  $6\mu\text{g}/\text{mL}$ 、RXM は  $24\mu\text{g}/\text{mL}$  以上の濃度で有意に抑制した。一方、 $\beta$ -ラクタム系抗菌薬の CEZ、CTM、CAZ は  $400\mu\text{g}/\text{mL}$  の濃度でも抑制を示さなかった。また、サイトカインの TNF は  $100\text{pg}/\text{ml}$  以上、IL-1 は  $10\text{ng}/\text{ml}$  以上、INF  $\gamma$  と IL-8 は  $100\text{ng}/\text{ml}$  以上で有意に遊走促進を示した。したがって、14 員環 MLs の EM、CAM、RXM だけでなく、15 員環 MLs の AZM も単核球の炎症性サイトカイン・ケモカイン産生抑制作用を有し、この作用が MLs の DPB 改善作用とアレルギー性の低下に関与していると考えられる。

## 10 2004年に上越総合病院小児科で分離された肺炎球菌・インフルエンザ菌の薬剤感受性の検討 — 2年前との比較および抗菌薬の前投与について—

大石 智洋・砂川 慶介

北里大学医学部感染症学

2004年1～3月に上越総合病院を受診した小児呼吸器感染罹患児より分離された肺炎球菌・インフルエンザ菌につき、薬剤感受性および抗菌薬前投与の有無を調べ、2年前(2002年9月～2003年3月)に行った同様の調査と比較した。肺炎球菌における PISP と PRSP を併せた割合は 55%、インフルエンザ菌における BLNAR の割合も 55% であったが、肺炎球菌は 2年前と同等であったのに対し、インフルエンザ菌は 2倍以上に急増していた。経口抗菌薬において、肺炎球菌インフルエンザ菌ともに効果の期待できる薬剤は、MIC および血中濃度を考慮すると、CDTR・CFTM であった。インフルエンザ菌検出例では、2年前および 2004年ともに抗菌薬の前投与があった群において耐性度が高く、BLNAR の増加と抗菌薬との関連が示唆された。

## II. 特別講演

### 「腸管感染症の最近の話題」

横浜市立市民病院感染症部部長

相 楽 裕 子